

『イツチ』をめぐって

白 藤 礼 幸

万葉の歌は、いわゆる万葉仮名で書かれており、それ故に、ある本文についてもそのよみ方に諸説をうむようになる。万葉をどうよむかは、万葉をよむ人すべてが、自ら試み、確認し、自らのよみとしなければならぬ第一の課題であろう。

万葉集には種々な表記法が行なわれているが、巻五・十四・十七以下などに多くみられる、一字一音の仮名書きの部分については、それが音価のみを表わしたものである故に、それらをどのように分節し、そこからどのようなことばの形と義を求めるかが問題となる。また漢籍にみられる語句・熟語を借用している場合、それは、その意味する事物・概念を媒介になされたものと思われる。しかし、あるものをピツタリと表現する語が両国語に共通して、いつもあるとは限らないのではないだろうか。一方が、ある一語でまとめてしまふものを、他方では、微妙な差を区別し、いろいろのことばを使い分けるといふこともあつたのではないだろうか。漢語を借用していても、そこに託されているのは、中国語ではない筈である。仮名書きの資料などによつて、当時存在したであろう万葉語——万葉歌人が用いた国語——を求め、その枠の中で、漢語の意味や、歌意から求められる意味、また歌ゆえの音数の制限を考えあわせて、その漢語にこめられたことばを求めるべきであろう。

例えば、巻二の二一〇と二一七の歌に、「髣髴」という語がみえるが、「万葉集注釈」で沢瀉博士が、前者を「ほのかに」、後者を「おほに」（「万葉集大成」では、「ほの（見し）」とよまれていた）とよみ分けられたのは、意味の差にもよられていようである。木下正俊氏が、「何」「何如」「如何」「奈何」についても云われているように（「『なに』と『いかに』と」）、その歌その歌でその語句に要求される意味によつてよみわけられるべきであろう。そのような点から、次のような、些細な改訓を主張するのである。

万葉集の疑問詞の一つに「イツチ」がある。

たちちの母が目見ずておほほしく伊豆知武伎提可あが別るらむ

（五・八八七）

霞るる富士の山びにわが来なば伊豆知武吉氏加妹が嘆かむ

（十四・三三五七）

愛し妹を伊都知由可米等山管の背向に寝しく今し侮しも

（十四・三五七七）

右の歌に見るように、「イツチ」は「向く」「行く」という動詞と結びついていることから、一般にいわれているように、方向を問う疑問詞と考えられる。この語は、巻十四の東歌と熊凝に代つて作

つた憶良の歌にみられるという偏在を示すが、
植竹のもとさへ響み出でていなば伊豆弁佐底可妹が嘆かむ

(十四・三四七四)

と、東国語の特質である音韻変化をした形「イツシ」があることから、「イツチ」は中央語であつたものと考えられる。試みに八代集をみると、次のような「イツチ」を求めることができる。

五月雨に物思ひをれば郭公夜ふかくなきていづち行くらむ

(古今・一五三)

わりなくもねてもさめてもこひしきか心をいづちやらばわすれん
世を捨てて山に入るひとやまにても猶うき時はいづちゆくらん

(古今・五七〇)

なきわびぬいづちかゆかむ時鳥なほうの花のかけははなれじ

(後撰・一五六)

もみち葉はちる木の下にとまりけり過ぎ行く秋や何地なるらむ
思はむとたのめし人はありときくいひし言の葉いづちいにけむ

(後撰・四三八)

夢にだにまだ見えなくに恋しきはいづちならへる心なるらむ

(後撰・七四一)

鶯のすはうこけどもぬしもなし風にまかせていづちいぬらむ

(拾遺・三七四)

物いひける女のいづちともなき所へなむいくといひ待りければ
いづちともしらぬわかれの旅なれどいかで涙の先に立つらむ

(後拾遺・四九二)

あしのやのこやの渡に日は暮れぬいづち行くらむ駒に任せて

(後拾遺・五〇九)

いづちとかよるはほたるののぼらん行方もしらぬ草の枕に

(新古今・二七二)

よの中をおもへばなべてちる花の我が身をさてもいづちかもせん

(新古今・一四七〇)

山深く年ふる我もある物をいづちか月の出でてゆくらん

(新古今・一九一九)

(古今集・新古今集は岩波古典大系本により、他は国民文庫本により国歌大観で歌番号を補つた。)

八代集の前半と新古今にみえ、金葉・詞花・千載にはみえないという偏りを示し、また、「何地」という表記に意味の屈曲を感じるのであるが、右の十四例中、九例は「行く」「往ぬ」という動詞がみられ、また、考えることのできるものであり、万葉の場合の「向」「行」という動詞と考えあわせ、やはり、方向を問う語として考えられていたものと思われる。

「イツチ」と類縁の語に、「イツク」「イツヘ」がある(「イツラ」という語に、筆者は場所を問う以外の意を認めるので、ここではふれない)。万葉に例を求めると次のようである。

「イツク」は仮名書の例を三例求めることができる。

…伊豆久欲利来りしものぞ眼交にもとな懸りて安眠し寝さぬ

(五・八〇二)

…紅の面の上に伊豆久由可織が来りし…

(五・八〇四)

梅の花散らくは伊豆久しかすがに此の城の山に雪はふりつつ

(五・八二二)

「イツヘ」には次の二例がある。

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何時辺乃方二わが恋やまむ

(二・八八)

わがここだ恩はく知らにほととぎす伊頭敵能山乎鳴きか越ゆらむ

(一九・四一九五)

「イツク」は、「より」「ゆ」などの起点・経過点を示す格助詞の
ついでることから、「どこ」と、場所を、それも点として具体的
限定的に問う語と考えられる。

「イツヘ」については、(一九・一四九五)の歌の注をみると、
「イツヘは何方なり」(新考)、「何方の山を鳴いて」(私注)、「どつ
ちの山を鳴いて」(大系)のように方向を問う語とする説と、「イ
ヅレノ山ハ何処ノ山ニテ何処ノ山ヲト云ナリ」(代匠記精)、「何
処ノ辺ノ山ヲ」(全釈)、「どの辺の山を」(大成)のように、「へ」
に「辺」をあて、「どこらへん」「どこらあたり」と、場所をやや漠
然と問う語とみる説とがある。

方向が、ある主体と対象とを結ぶ線分の向きで表わされるものと
すれば、この(四一九五)の歌は、「怨霍公鳥睥睨」で作った歌で
あり、霍公鳥はまだ作者にとらえられておらず、方向という直線に
よる関係以前の、声の聞こえない遠さという、距離的關係以上のも
のではない。また(二・八八)の歌については、野中春水先生が他
義に解されているが(「何時辺乃方考」万葉九号)、「何時辺」を
「イツヘ」とみた時、下の「方」との意味の重複をさげるために
も、「イツヘ」は方向を問う語と解しないほうがよいと思われる。
これらによつても、「イツヘ」は、代匠記・全釈・大成の説に従い
たい。次の二首の歌は、この説の根拠となりえよう。

寝をも寝ずあが思ふ君者何処辺この身誰とか待てど来まきぬ

(十三・三二七七)

たゆひ潟潮満ちわたる伊豆由可母愛しき背ろがわがり通はむ

(十四・三五四九)

即ち、「イツチ」は方向を、「イツク」は具体的・限定的に場所
を、「イツヘ」は場所を大雑把に、問う語と定義されよう。この点

から、次の四例の「何処」を、「イツク」から「イツチ」へ改めた
いのである。

万葉集中、十五例の「何処」と、六例の「何所」が認められる。
これらは、殆んど「イツク」とよまれて異訓をみないものである
(代匠記・童蒙抄・万葉考などでは、「イツコ」とよんでいるが、
その仮名書きの例をみないため、「イツコ」は一般に否定されるが、
意味は「イツク」と同じと考える)。しかし、右に定義した意味をあ
てはめて、「どこ」といつては、おちつかない「何処」がある。

(1)わが背子を何処行目跡さき竹の背向に寝しく今し悔しも

(七・一四二二)

(2)此間為而家八方何処白雲のたなびく山を越えて来にけり

(三・二八七)

(3)此間在而筑紫也何処白雲のたなびく山の方にしあるらし

(四・五七四)

(4)此間在而春日也何処雨ざわり出でていかねば恋ひつづぞをる

(八・一五七〇)

(1)は(十四・三五七七)の類歌である。「行目」と已然形で止め
られているように、反語であつて「私から離れる」という、一つの
方向が強く否定されているのであり、「何処」で要求される説明は
さほど必要ではない。また、下旬にある「背向」も一つの向きを示
す語である。代匠記・童蒙抄は「イツチ」とよんでいる。

(2)(3)(4)の歌で、「此間為而」「此間在而」と自分の位置をまず明
示しようとしているのは何故であろう。それは、「家」「筑紫」

「春日」を、自分の位置との関係で求めているからである。即ち、
方向を問うているのである。「家」からは「白雲乃棚引山乎超而来
二家里」なのであり、「筑紫」は「白雲乃棚引山之方西有良思」と
「何処」を推量しているのであつて、「何処」でもつて、点として

の「家」「筑紫」「春日」を求めているのではないと思われる。(八・一五七〇)の歌は、天候によつては春日野は遠望が効くらしいことが、次の一五七一番の歌から推察できるから別にするとしても、「家」「筑紫」は、「此間」からは遠望できるものではないさそうである。三首とも「イツク」(或は「イツコ」とよまれて全く異訓をみないが、意味は、(三・二八七)では大成が「何方であらうか」(四・五七四)では全釈が「ドチラノ方デアラウ」総釈・全注釈が「どちら」(八・一五七〇)では全注釈が「どちらだらう」大系が「どつちにあたるだらう」とあるように、場所を問うているのではなく、方向を問うていると解しているのである。意味は「イツク」ではなかつたのである。

ところで、万葉語には、方向を問う語として「イツチ」があつたのではなかつたか。

新訂増補国史大系本日本書紀に「何処」に「イツチ」と訓をあてた、次のようなものがみえる。(数は国史大系のページおよび行を示す)。

- 童女何処去矣 (垂仁紀前 177A)
- 何処将去白鳥也 (仲哀紀前 222A)
- 且何処往矣 (履中紀前 323A)
- 吾兄王何処去耶 (履中紀前 320A)
- 何何処 (皇極紀後 200A)
- 何所往 (天武紀後 316A)

ここにおいても、「何処(所)」をうけている動詞が「往」「去」「向」であることも、万葉や八代集の場合と一致する。これらの訓について、時代などの評価の上で問題があるが、少なくとも、「何処」が「イツチ」とよまれたことがある、ということの根拠にはなるであろう。

万葉集に「何方」という語が八例みられるが、そのうち七例は、「イカサマ(ニ)」とよまれているもので、これは方向はおろか、場所を問うているでもない。他の一例は、

大海を候ふ港事しあらば從何方君は吾を率凌がむ(七・一三〇八)の歌で、代匠記精・童蒙抄が「いかさまに」とよんでいる以外、代匠記初・万葉考・略解・新考・総釈が「イツク」古義・全釈・定本以下が「イツヘ」とよんでいるが、「從」によつても、この「何方」は方向を問う語ではない。

また諸橋轍次氏の「大漢和辞典」をみても、「何方」はみえないし、「何」の項の熟語をみても、方向を問う漢語はみつけれないようである。漢語として、方向を問う形は独立してはないのではないかと、また、「何処」の中にその意も含められているのではないかと。中国語としてはともかく、万葉において、先にみたように「何処」に方向を問う意を求めることのできるものがあるのである。万葉語としては、「イツク」「イツチ」それぞれ存在し、意味をそれぞれ異にしている。「イツチ」を表わす場合、巻々の表記の態度の別によつて、意的に表記しなければならぬ時、漢語としてそれに対応する形がないために、比較的類似した「何処」を用いたと考えることはできないだろうか。

このように、先の四首の歌にみられる「何処」は、類歌の存在や意味などによつて、また書紀の訓などによつて、「イツチ」とよみうることも、万更根拠なしとはいえないであろう。尤も、この改訓は、先の諸注の引用にみたように、解釈には何も影響しないものであるが、筆者が定義した「イツチ」と「イツク」の区別が可能ならば、ことは形と義との一致をはかるためにも、「イツチ」とよまれるべきではないだろうか。或はそれは、筆者の偏狭さであろうか。